

川崎市立 川崎高等学校附属中学校

【神奈川県川崎市川崎区】

取材・文／鈴木隆祐 写真／松沢雅彦 デザイン／上野昭浩



設備の充実が首都圏でも指折り。川崎の町に根ざしながら、地域を超えた発信力を培う学び舎には、夢追い人たちが集う

市立川崎が高校普通科募集を停止

2014年、川崎市立川崎高校に附属中学校が新たに併設された。神奈川県第2の都市、川崎市が初めて中高一貫教育に乗り出したのだ。そして体系・継続的な教育活動の更なる推進のため、来年度からの高校普通科の募集停止を決定。併設型ではあるが、中等教育学校に近い形での中高一貫教育が行われていく。

川崎は人口約154万人を抱える、1972年にはすでに政令指定都市となった大都市である。人口376万人を数える、同じ神奈川県の横浜市には及ばないが、72万人の相模原市に比べれば倍の規模。人口146万人の京都市や152万人の神戸市、

また160万人の福岡市という、それぞれ県庁所在地と肩を並べる。

全国に市立の中高一貫校は22校。うち全国に20ある政令指定都市の市立は14校。というバランスを見ても、この先、これまで附属中を持たなかった政令指定都市、またそれに準ずる中核市の市立高が、一挙に一貫化する気配が濃厚だ。現に埼玉県の川口市立高校では、来年度から附設中開校が決定している。

市立川崎は附属中・高校普通科とも全市1学区である。高校の普通科を除く学科（生活科学科・福祉科）は神奈川県内全域学区。19年度の川崎の12歳人口が6000人台なので、その数だけ見ると、非常にリージョナルな選択だ。他に51校

も市立中があり、もちろん無試験で入学できる。確固たる公立の義務教育の枠組みがある中、たった1校、適性検査を経て入学者を決定する中学があるわけだ。附属中は母体校である川崎高等学校の教育目標「こころ豊かな人になろう」を継承し、人権感覚豊かで高い志をもって学び続け、国際都市川崎をリードする逞しい人材育成を目指している。社会が大きくそして急速に変化する中、その多様性の中で、体系的な6年間の一貫教育を通して、これからの社会を創っていくために必要な力を身につけていく。

市を象徴する総合力に富んだ施設

来年度から終了するのは高校普通科入試だけではなかった。昨年11月20日付の神奈川新聞にこんな記事が載っていた。『倍率0.2倍、募集停止へ 市立川崎高校定時制夜間部』。夜間部もこの何年かはずっと定員割れが続いていたのだ。

川崎は京浜工業地帯のただ中であって、定時制の需要も高かった。高度経済成長期、いわゆる金の卵世代が全国から集まり、寮暮らしをしながら工員として働き、仕事を終わると高校に通った。そんな時代の映画をとみに追いかけている私は、市立川崎高附属中の今達也教頭への取材を、ついそんな話から始めた。

「川崎駅に着くとホームに、『上を向いて歩こう』のメロディが流れますね。川崎出身の坂本九の同

じく代表曲、『見上げてごらん夜の星を』は映画にもなりましたが、元は定時制を舞台にしたミュージカルの主題歌なんです。



昨年からは兼任した今教頭。大卒後しばらく日産自動車に勤務し、工場の労務人事を担当というキャリアが活かされている

人口150万の都市が目指す、中高一貫教育の新たな形

中3の3クラスは年間の学級目標を定めるため、生徒が意見を戦わせていた



フェイスシールドをつけながらだったが、2組では4人1組に分かれ、普段通りに合議。3-2が1番＝サニーという奮った標語が選ばれた

コロナ禍の今、妙に思い返される歌ですね」

主に東北地方から集団就職で上京した若者たちが作品の主人公。苦しい時には故郷を思い出して夜空を見上げ、ささやかな明日へと希望をつなぐ。やがて彼らが懸命に働き、学ぶ町が新しい故郷になっていく。川崎はそんな町なのだ。自身、川崎出身という今教頭は大きくうなづく。

「本校は川崎という土地と切っても切り離せませ



全学年が色紙を貼り合わせ、自分の名札代わりの「バッチワーク」を作る



ほぼ全員にクラスでの役割がある。1年生でも積極的に自薦する



控えめに貼り出された教員手製のポスターに、市立川崎のチームワークが光る



1時間を要してクラスの分担を決めた後、1年生は初めて校内を見て回った

ん。専門学科や定時制、南部地域療育センターを含めた教育・福祉機関が同じ場に集まっています」

だから、7年前に完成した市立川崎の校舎は、ちょっとした大学並みに大きい。今教頭は「全部回ると1時間くらいかかる」と言う。その施設を眺めるだけで、普通科に連なる学びの意義を痛感する。この総合的な空間を共有するだけで、学びもインクルーシブ（包摂的）になる。

「9月の神無祭（文化祭）は全校挙げてですか？日頃の学習でも交流の場が作れるといいですね」と私はつい差し出がましい口を聞いてしまう。だが、校舎内の生活科学科ゾーンを通り抜ける際に目を射る、服飾系の生徒作のドレスの数々は、フツの普通科ではお目にかかれない。つまり一般の生徒も家庭科の授業では、この充実した設備を使えるのだ。

夢を持てば未来の学びに開かれる

訪問時は分散登校を開始したばかり。中3は

ようやくクラスの役割や目標を決め、中1も同様だが、校内見学も予定されていた。これに随行しながら、校舎に控えめに貼られていたポスターに目を見張った。教職員一同が手を広げ、「おかえり みんな待ってたよ!!!」の文字が踊る。思わず涙が込み上げた。在校生はむろん、新入生はこの日をどれだけ待ち侘びたことか。登校はまだ2回目の彼らにとっても、学校は帰ってくるべき場所だった。

中学の植村裕之校長は同校に開校準備室の



教育目標「LEAD」の中でもとりわけ、D = Dream を重んじる校風。それは植村校長自身が夢多き教師だからだ



Zoomを使ってテンポのよい授業運びの、筑波大学でナノテクを修めた肥田藍教諭の高2化学

段階から携わり、初代教頭も務めた。そして、教育委員会を経て、今年からまた校長として復帰した。快活な笑顔が印象的で、「生徒にも、教職員にも、『夢』を持ちながら教育活動に向かう元気をいつもいただける先生」が今教頭の校長評だ。

1年生が取り組む農業体験の教育課程を創立時に作ったのが植村校長。都市部である川崎の子が農業を体験する。アクアラインを使えば1時間弱で行ける、千葉県君津市の農家とタイアップ。現地の畑を借り、また校内の屋上菜園と並行して枝豆を育てる。「青いうちに収穫した豆を味わった後、そのまま大豆にして味噌作りにも挑戦します。それぞれ生徒には自宅に持ち帰らせませんが、保護者にも非常に好評です。農業を切り口に世の中を見ていく中、めいめいでテーマを見つけ、掘り下げる学習にまで深め、生徒はその成果をプレゼンテーションします」

市立川崎独自の「かわさき LEAD プロジェクト」は「実体験を通して自ら課題を見つけ、仲間と協働しながら解決していく過程を重視している。取り組む中で新たな疑問や課題が生まれ、スパイラルに学びを深めていくことで、将来必要な力が育まれると考える」と植村校長は語る。県立

生徒二人一台に行き渡るPCが担保し、オンライン授業も捗る



東京学芸大学教職大学院で国際教育も学んだ黒川翔太教諭の高3倫理・政治経済も滑らかな教えぶり



空き時間の教諭も廊下のコモンスペースで授業をサポートする様子は、まるでテレビのモニター室のよう

中等教育では「かながわ次世代教養」、横浜市立南高校附属中では「EGG」と、公立中高一貫校ごとに特徴がある神奈川の総合学習だが、市立川崎では「LEAD」。「LEAD」のLはLearn(学び)、EはExperience(体験)、AはAction(行動)、

DはDream(夢)の略だが、この夢をまず重んじることで、それぞれが連関していく。

校長は中1の農業体験を「生きる上で大切な一次産業の体験を通した学びから始まる」と提議づける。

「そして、中2では様々な職業を体験します。中3ではさらに視野を広げ、私たちの住む『まち』をテーマに学習する。高校では市役所とも連携を図り、わたしたちの『まち』をより良くする提言を考える。そんな大きな学びの流れの中で、骨太の学力を育むことを意図しています。そして、高校卒業時には、さらに深く追求したい学問分野など見つけ、巣立ってけると嬉しい」

そう語る植村校長のリーダーシップが教員にも生徒にも行き渡り、「生徒が夢を持てるような教育に取り組んでいきたいと毎日感じています」と今教頭も日々の充実を語る。毎日45分授業がきちんと7コマ繰り広げられ、みっちり学習を進める学校でありながら、不思議と通気性がよいのは、開放的な造りの校舎のおかげばかりではあるまい。そこに集う人のぶんだけ、夢が満ち溢れているからだ。夢は人と人との間の流れを促す、なによりの空気清浄機。コロナ騒動がすっかり終息したら、すぐにでもまた再訪し、市立川崎各人の夢を現認したいと思う。



最上階のまだ真新しいプールは毎年、太陽熱で温まり例年10～11月まで使用可能という

大学並みの施設を他の学科と共有。創造性がそこから磨かれる



約500人を収容する講堂も自慢。書道室には背の低い専用机が置かれていた



中1生は生徒手帳に貼る写真撮影に臨む。瞬時マスクを外し、緊張の面持ちに

1年のあゆみ

農業体験がリードする、「LEAD」教育をバネに

自ら英語で話しかける積極性を見せる。

2年の職場体験、3年の夏季学習会と、夏を制す者には幸が多い仕組みなのだ。職場体験も今年は厳しいが、市内45にも上る事業所が協力を惜しまない。その成果を自社のサイトにアップする広告会社もあるくらいで、協力先にもフィードバック効果が望めるのだろう。



体育祭は競技だけでなく、応援合戦、Tシャツ、応援団幕の部ごとに6ブロックに分かれて競う

体験は夏休みとその前後に集中

市立川崎の体育祭は5月と早い。中1生にとっては入学後すぐの、八ヶ岳での自然教室に立て続く大行事。五月病になる暇もなく、高校と合同で行われるこの祭に熱中するうち、すっかり川崎生になっている。

そして、夏休み前の充実ぶりが半端ない。中1生は農業フィールドワークで君津市に向かい、枝豆の種蒔きで泥にまみれる。枝豆は小糸在来といい、甘味が強く香り豊かで、市場では「北陸・東北地方の茶豆に勝るとも劣らない味」と評価されているとか。これを1年ひとり一人が20粒ずつ植え付ける。収穫は10月に行い、その後には味噌にする。この作業に加えて、ニンジン収穫体験なども行う。

また7月下旬には、学校を3日間開放しての、「English Camp」も待ち受ける。これは川崎市が契約するALT派遣会社のスタッフが20数名も大挙して押し寄せ、日常が英語で染められてしまうという、画期的な企画。むろん日本語の使用は禁止で、英語科以外の教諭も必死になって英語で食らいつく。そんな様子を眺め、最初はおずおずとしていた生徒も、3日目には外国人スタッフに



7月に播いた枝豆の種が10月にはこんなに大きく育つ。千葉県君津市で借り上げた農園にて



フィールドワークに先立ち、校舎屋上の菜園にも同種の種を植え付ける。当番の生徒が夏休みに水遣り、手入れを行う



中2の職場体験先も豊富。動物病院だけでなく、牧場でも家畜と触れ合えるのが川崎だ

文化祭は中高合同で行い、生活科学科のファッションショーを普通科生徒も楽しみにしている



近況MEMO

川崎ドリーム号、ようやく発進

理科の授業もPCで全員の考察を共有。1年生がPCの使い方を学びながらの授業を展開していた。



6月3週目、いよいよ通常授業が始まった。本稿執筆中に届いた嬉しい知らせだ。全員マスク姿ではあるが、中1理科の授業では1人に1台供与されるPCを使い、めいめい打ち込んだ考察をスクリーンで全員が共有する授業を展開していた。給食も同時にスタート。川崎市が完全給食を開始したのは17年からのので、まだ歴史は浅い。地産野菜を用い、健康に徹底して配慮するメニューが保護者にも好評だ。

美術や外国語指導助手の参加する英語など、オンラインではどうしても及ばない授業に、今の学校の魅力は詰まっている。それらも問題なく始動した様子。やっと取り戻した日常を元の本阿弥にせぬよう、「新しい生活様式」への留意は必要だが、もろもろの遅れの挽回もスムーズに行きそうだ。



完全開始から半年後の18年4月のアンケートでも、8割超が「おいしい」と答えた給食

美術室内外に溢れるセンスの伝播

夏休みが終わると、すぐに文化祭。9月に行われるが、旧暦10月にちなみ「神無祭」と呼ぶ。普通科だけでなく市立川崎の底力を体感する空間だ。生活科学科服飾系にとって、オープニングの

ファッションショーは檜舞台。また、食物系の模擬店もひと味違う。市立川崎が長らく地域住民に愛されてきたのも、こうした場での彼らの貢献が大なのだ。

今回の訪問では部活も一切見られな



表千家の講師に季節に応じた礼作法を学び、お点前を練習する茶道部



エントランスにも大胆な筆遣いの書が飾られ、書道部の活動の熱心が伝わる



生徒全員が英語で様々なパフォーマンスをする、12月の「English Challenge」も例年大盛り上がりだ

かったが、美術室内に入ると、授業で描かれた自画像、部活で制作されたオブジェなどが所狭しと飾られていた。教諭の指導法が確かなのだろうが、先輩や同輩の作品に刺激され、もう1ステップ上の表現を目指す生徒の姿が見えてきた。

市立川崎の日常がこんな面でも、徐々に復活していく。アフターコロナの今、全国の力ある中高は同じように羽ばたいているのだろう。できるだけその場に立ち会いたい。私自身は「市立川崎にはモチベーションを授かった」。そう教頭にも告げ、再訪を誓うのだった。

合唱は部活を超えた、新生川崎の伝統

市立川崎は部活動の他に、「有志合唱団」が活躍している。他の部活動に入部しながらどの生徒でも参加でき、毎朝校内のスクエア（ピロティ）で15分程度の練習に励む。ただ、自主練ではなく、音楽科の教諭がしっかり指導にもつく。全校生徒360人規模の学校で、約140人が所属するので、参加率も4割近い。

「合唱が好きな生徒が本当に多い」と今教頭も相好を崩す。なんにでもチャレンジという校風が、こんな日常からも窺い知れる。そして、有志合唱団は昨年のNHK合唱コンクールでは県大会に出場。TBS こども音楽コンクールでは東日本優秀演奏発表会（関東大会に相当）に進出した。

川崎出身のSHISHAMOの『君の隣にいたいから』がNコンの課題曲だったが、昨年8月の県コンクール前にはNHKの取材でSHISHAMOも来校。生徒たちにはサプライズだったので、大喜びだったという。NHKの

昨年参加したNコン神奈川大会の様子。甲子園同様、この合唱の祭典も今年取り止めた



『SONGS』という番組でも、その模様は放映された（19年8月31日）。

市立川崎では朝から生徒たちの歌声を聞き、爽やかな1日が始まる。「しばらくはコロナで活動もできない状況なのが残念」と今教頭。いち早く合唱でコロナも吹き飛ばしてもらいたい。



川崎市立川崎高等学校附属中学校

基本データ

沿革

- 1911年：川崎町立女子技芸補習学校として開校。
- 1923年：川崎町立川崎実科高等女学校と改称。
- 1942年：川崎市立川崎高等女学校と改称した。
- 1948年：川崎市立川崎高等学校・定時制家庭科（昼・夜間部）、ならびに別科を設置。
- 1951年：現在地に移転。
- 1997年：福祉科を開設し、全日制普通科・生活科学科・福祉科、定時制普通科となる。
- 2014年：川崎市立川崎高等学校附属中学校を新しく併設し、併設型中高一貫教育を開始すると同時に、定時制課程に昼間部を新設。
- 2019年：2021年度より高校普通科の募集を停止。

所在地 〒210-0806 神奈川県川崎市川崎区中島三丁目3番1号

交通 JR「川崎駅」東口より・徒歩 20 分、川崎市バスで10 分程度

出身者 京浜急行大師線「港町駅」から徒歩12分
中里恒子（作家、芥川賞受賞）、ジョニー大倉（歌手・俳優）、刀根麻理子（歌手）、齋藤学（サッカー選手、川崎フロンターレ所属）… etc.

傾向と対策

45分/200点ずつの適性検査Ⅰ・Ⅱ、並びに約7人1グループの集団面接を課す。さらに調査書（6年8教科評定）も考慮に入れて判定。適性検査得点×0.7+グループ面接点×0.2+調査書×0.1が配点比率となる。検査Ⅰは案内図の問題、漢字、語句、読解問題、作文（400字程度）と言った構成。コミュニケーションや言語の技能をテーマとする題材が多く出題される作文は、全体の1/3を占める配点のため重要。検査Ⅱは理数系問題が中心だが、雨温図や地形図を読み解くなど、資料分析の技量が問われ、記述問題も多い。面接の質問内容は2つ。1つ目は「面接官との1:1の質疑対応」で、質問に対して挙手をして答える。2つ目は「7人によるディスカッション」で、やはり挙手をしてから他のメンバーの発言に意見や質問をする。

2020年度一般枠募集 志願状況

男女別で定員を設けず、男女比は平均して男子1：女子2。志願者数は前年度に比べると若干減ったが、完全一貫化が決まり、さらに倍率は高まると予想される。

募集定員	男女計 120 名
受検者数	483 名
倍率	4.025 倍

大学合格実績 （一貫から初の高卒生を出した今期のみ）

国公立大学名	2020
東京大学	1
一橋大学	2
東京外国語大学	3
筑波大学	1
横浜国立大学	3
電気通信大学	2
東京海洋大学	1
東京農工大学	1
横浜国立大学	2

私立大学名	2020
慶應義塾大学	9
早稲田大学	11
上智大学	14
東京理科大学	8
明治大学	15
青山学院大学	11
立教大学	15
中央大学	10
法政大学	18
学習院大学	3
成城大学	11
成蹊大学	4
明治学院大学	6
同志社大学	2